

Q8：商品の期末評価について、取得原価と時価のどちらを使用すべきか、意見を述べてください。

1. 価格が下がった場合は時価を使用し、取得原価を時価が上回った場合は、取得原価のままでよいと思います。もし商品の評価益を出してしまうと、あるはずのない利益が計上されてしまい、部外関係者に誤った情報を教えることになり、さらには自分の払う税金が増えてしまい現金同等物が減り空白の利益のみが増えてしまい悪循環を生んでしまう。逆に評価損を出す場合は費用が増え払う税金を少なくなるので現金同等物の減少を少なくする事ができ空白の費用が発生するので、企業にとってはプラスになり、時価の低下という損を税金の支払額を減らすことで少しでもまかなうことができる。
2. 商品は取得原価で使用するべきだと思う。商品の品種が少なければ時価でも構わないと思うが、品種が多いと一つ一つ会計処理していかないといけないし、帳簿記入するのが大変だと思うから。
3. 時価評価を使用すべきだと思います。例えば電化製品など、最新版が出れば今まで出ていた電化製品は旧式となって売値も下げて販売されるのでいつまでも取得原価にしないほうが良いと思います。
4. 時価：商品は流動性が高く、売ることを目的としているから時価の影響を受けやすいから少しでも損失の影響を防ぐため、時価評価した方がよいと考える
5. 商品の期末評価については、取得原価を使用すべきだと思います。理由は、時間が経っても古くなったりしないと思うし、取得原価のままで評価してもいいと思うからです。もし、その商品の価値が下がることがあるなら、商品評価損を使って処理していけば良いと思います。
6. 売買目的で購入しているので商品の価値が下がった時は、時価評価する。しかし、上がった時は、時価評価はしない。このことは、企業会計原則の保守主義の原則で、費用や損は先に計上して、利益などは後から計上する考えかたからきている。
7. 時価を使うべきだと思う。日々の価格変動を求めておくと、その商品の価格の変動の傾向を考えやすいと思うのでそう考える。
8. 取得原価を採用すべき。商品はその時々トレンドによって常に変動的であるから時価で計上するのはリスクがある。しかし見方によっては時価の下がった商品の価値が今後上がるということは一般的には考えにくい。最大限に経営に対する影響を抑えるためのリスクヘッジを行うには時価の下がっているものを時価で計上し、時価の上がっているものを取得原価で計上するという手法もあるかもしれない。
9. 時価を使用すべきだと思います。まず、企業は売買目的で所有する資産ですから、商品の時価は直接販売単価とつながります。例えば時価が著しく下降したとき企業はもとの売価では売れなくなってしまい、売価をへらさなければならないでしょう。取得原価で評価してしまったら、商品を売却するときは必ず損を出してし

まいます。それで企業会計原則の保守主義の原則で、その期で損失を計上すべきということになります。

10. 取得原価とは資産や製品の取得や製造に要した金額のこと。取得原価には資産や製品の取得・製造に直接支出した金額のみではなく、運賃や買入手数料・運送保険料などの附属費用も含められる。時価はそれと対置される概念である。取得原価の長所は、領収書などの証憑書類による検証が可能な信頼性の高い価値という点である。そしたら取得原価を使用する。
11. 私は、取得原価を使用すべきだと思う。なぜなら、その商品を仕入れた時の価格が今どうなっているか（時価を）判断した方が会社や企業の利益や損失など分かりやすいと思う。
12. 期末評価について、取得価格を使用すべきと思う。損失と利益を反映する。
13. 商品の期末評価について、商品時価を使用すべきと思います。商品の期末評価は商品最後の評価です。だから、取得原価より時価の方がいいと思います。
14. 必ずどちらかを選び、時価評価が益も計上するという評価方法を前提とするなら、取得原価を使用するほうが良いと思う。評価益をあげる場合、すぐに売却可能な有証と異なり、繰越商品は販売して売れるかどうか全くわからないし、販売するという行為はすぐにキャッシュにつながらない。その中で評価益とあげるということは実現するかどうかかわからない利益を計上することになると思う。ただし、流行遅れなどで長期にわたってかかえる在庫は取得原価でも売れるかわからないので、評価損に計上する方が正しい損益計算ができるのではないかと考える。

Q9：固定資産の評価について、取得原価と時価のどちらを使用すべきか、意見を述べてください。

1. 流動性がほぼ皆無なので取得原価でよい。利益操作の原因になりそうだから。
2. 固定資産についても取得原価を使用すべきだと思います。すぐに売却するなら別ですが、だいたいは長期保有目的で買うので、それに時価評価をして損ならまだしも、益がでると、その分利益が上がって税金もとられますし。
3. 時価評価するべきだと思います。固定資産は目に見えていなくてもその価値はどんどん下がっていついっぺんかで時価評価にすべきだと思います。
4. 取得原価:固定資産は使用することを目的としていて売ることを目的としてないので取得原価でいいと思う
ただいざというときの資金確保にもなるから少しでも損失の影響を防ぐため、原価消却は必要だと考える
5. 固定資産の評価については、時価を使用するべきだと思います。建物や備品は、商品とは違い、20 年も 30 年も長く使っていくものであり、毎年価値は下がっていくものです。そのため、取得原価で評価をする
と固定資産の状態が分からないと思うので、時価で評価した方がよいと思いました。
6. 売買目的で購入したわけではないので取得原価を使用すべき。そこから、使った分の価値を減らしていく。
なぜ時価評価しないのかは、固定資産を時価評価しても、使うために買ったのだから、価値が上がっても下がっても使うことに対して影響がないから。
7. 取得原価を使用すべきだと思う。固定資産の価格が変動しようがしまいが、そこから自分達の利益が変動することはないからである。
8. 取得原価を採用するべき。基本的に大きく変動幅があり、固定資産は特に大きな評価益を計上したものの価値が大きく下回るような場合に経営に大きく影響を与える上に、それらが自己のコントロール下に置くことは困難を極めるから。
9. 固定資産は売買目的ではないので、取得原価で計上すべきだと思います。その代わりに減価償却という形で損失を計上します。私は原価償却より、減損で処理した方がより適切に固定資産の使用状況を判断できると思います。減価償却は単に過去の経済事業に対して損失を每期計上します。減損は将来利益見込みに対して、経済的価値はどれぐら減少したのかを計価するものです。企業は着眼すべきは過去ではなく、将来ではないでしょうかという発想に基づいて減損処理の方がいいと考えました。
10. 固定資産の評価は、場合によって変えてもいいと思う。例えば、固定資産が物や備品等の場合、期末評価が損でも益でも取得原価の方が良いと思う。使っていくうちに、ある程度購入時より質は落ちるのだから、た

とえその評価が上がっても買った時の方が良い状態であるから。しかし、土地などの資産については、時価で評価しても良いと思う。何もない所であっても、地価が上がると高くなり、下がると低くなる。土地では、時価を知っておく方が設立するにも重要だと思う。

11. 固定資産の評価について、時価を使用するべきと思う。減価償却は必要がある。時価で B/S に計上するから。
12. 固定資産の評価について、取得原価を使用する方がいいと思います。固定資産を計算する時、固定資産販売の損失の表すことも必要です。だから取得原価を使用したいと思います。
13. 固定資産は本来営業活動のために取得するものであり、固定資産の利用や使用により売上に貢献するという性質があるため、使った分（減価償却費）を売上に貢献した費用として販管費に計上されるものなので、時価評価より取得原価の方が良いように考える。

Q10：有価証券の評価について、取得原価と時価のどちらを使用すべきか、意見を述べてください。

1. 商品とほぼ同じ考え。違うところは業務提携、子会社株式などは流動性がないと考えられるので取得原価のままでよい。あまりにも有価証券、固定資産、商品などで費用を発生させてしまうと企業は得をするが国や株主などが損をしてしまう。
2. 有価証券の評価について、流動性の高いものなら時価評価で良いと思いますが、流動性の低いもの（つまり、長期保有目的）は取得原価で。後者は Q9 と同じで子株とかだと売らないのが前提で買ってますので、それをいちいち時価になおして益でもでると税金ばかりとられるだけなので。
3. 売買目的なら時価評価で、満期保有なら取得原価ですべきだと思います。売買目的なら株価などが上がればすぐに売るので時価評価するべきだと思います。満期保有なら値上がりしようが満期までの利息も子会社に対する支配力を持つとくための保有なので取得原価にすべきだと思います。
4. 時価：有価証券も商品と同様、流動性が高く、売ることを目的としているから、時価の影響を受けやすいから また、有価証券は、特に時価変動がおきやすく、損失がでた場合の会社への影響が大きいと思うから
5. 有価証券の評価については、時価を使用すべきだと思います。有価証券の中でも、売買目的は時価で評価しますが、子会社・関連会社株式は取得原価で処理するなど、処理方法が違います。でも私は、時価で処理した方が、どれだけ益がでたか、損が出たか分かるので、良いと思います。
6. 有価証券は、いつでも売却することができるので、每期評価替えをする。
7. 時価を使用すべきだと思う。有価証券は買った物を売った時に利益が産まれるので、タイミングが大切である。そこで、利益の多くなるタイミングを考えるために、時価の変動をデータにとって分析することが大切になってくるからだ。
8. 取得原価を採用すべき。なぜなら有価証券は時価の変動が多いため、仮に一般的な評価益を計上した場合、実現していないにもかかわらず次期以降の経営手法に影響を与えるにもかかわらず変動的だから。
9. 有価証券は使用目的により評価方法も違ってきます。売買目的の有価証券は商品と同様なので、時価で評価すべきです。満期まで保有するための有価証券は固定資産と同様で取得原価で評価すべきです。ただし、帳簿価格より高い、もしくは低い値段で取得した有価証券は金利の調整が認められるときに、償却原価法で每期償却する必要があります。
10. 有価証券の取得における付随費用は、取得した有価証券の取得価額に含める。なお、期末に保有している有価証券を時価評価する場合、その時価には取得又は売却に要する付随費用を含めない。

11. 有価証券の評価は取得原価を使用する方が良いと思う。有価証券の価格は変動する事が多いので、取得した時の原価を見て、評価が上がったか下がったかを見る方が、この有価証券を持つことに利益があるのかないのか分かりやすい材料になると思う。
12. 有価証券の評価について、取得原価を使用するべきと思う。有価証券は商品と同様、買った時の値段と売った時の値段が利益になるので。
13. 有価証券の評価について、時価を使用するべきです。有価証券評価する時、有価証券売却損益も表す。償却原価の計算も必要です。だから時価を使用する。
14. 有価証券は市場で売却がいつでもでき、実際の売却価格は常に市場の流れによって変動しているので、決算時の市場価格に決算時の売却価格になるため時価評価が適していると思う。

Q11：取得原価で作成された F/S の長所

1. 本当の利益が嘘なく表示することができる。
2. 空白の費用や利益がでない。
3. 常に取得原価が記載されていて、比較しやすい。(流動性の低い)
4. 客観的な測定ができる。
5. 検証可能性。
6. シンプルな利益、損失で見ることができる
7. 利益を過剰に計上することもない
8. 買った値段が分かる。
9. 価値が一定でない物を一定とみなすことで簡略化できる。
10. 企業が調達した資金の流れを考えやすい
11. 客観的に測定しやすい
12. 架空利益は存在しない
13. 利益操作は困難
14. 取得に要した支出額により資産を評価するため。資産評価の方法に関して首尾一貫性を保つことができ、検証可能性が高く、資産評価の客観性が確保されるという特徴がある。
15. 取得原価で作成された F/S では、取得時の価格が分かり、それが期末で評価された時に損益が分かりやすい。(原価が基準となっているため)
16. 費用、収益対応の原則の適正化に役立つ
17. 個別利益の測定に役立つ
18. 取得原価が原則的な資産評価基準として採用されている。多くの企業が保有する資産は、事業用資産の割合が資産のほとんどの部分を構成しているので、実体資本や実質資本維持が図れない。
19. 決算処理が楽
20. 取得原価がわかりやすい
21. 減価償却を行う資産については費用の計算がしやすい

Q11：取得原価で作成された F/S の短所

1. 融通がきかない。
2. 株主側からすると、とくに流動性の高いものだと、例えばカブだとする取得原価で書かれていると、比較しにくい。その企業は今、どのぐらいの価値があるのか判断しにくい。
3. 企業の財政状態を適正に表示しない。
4. 大きな損失の時に影響を受けやすい
5. 損益の状況が分からない。
6. 価値が一定でない物の正しい評価がされない。
7. 企業の財政状態を適正に表示できない
8. 費用と収益の計算が合理性にかけるようになる
9. 期間損益が適切に表示できない。
10. 資産の評価が時価と乖離することがあるため経済的実態をあらわさず、利害関係者に対する有用な会計情報の開示が可能でないことがある。
11. 仕訳が増える。
12. 最後の価格は少し見にくい、すぐ理解できない。
13. 最初の価格のままなので、損失が先にくりこされてしまう
14. 決算時の実際の資産価値がわかりにくい

Q12：時価で作成された F/S の長所

1. 損失を発生させることで支払う税金を減らすことができ企業にとってはプラスになる。
2. 流動性の高いもので、すぐに売却するなら、そのモノの価値が分かる。
3. 益、損を多く見せれて、配当増大や税金軽減などができる。
4. 時価評価を流動性の高いもの（商品以外）に通用すると、その企業の価値があるか判断しやすい。
5. 時価評価なので時価が下がって当期純利益が少なければ税金が少なくて済むこと。
6. もし大きな損失が出ても備えているので影響を軽減できる
7. 決算時点の状況が分かる。
8. 売買目的の物のいまの価値で評価がされる。
9. 現時点の企業の営業成績を表すことができる
10. 期間損益が適切に表示できる。
11. 現在価値である時価を再評価することで、貸借対照表上に含み益や含み損も反映され、企業の正確な財政状態を把握することができる。
12. 損益がすぐ分かる。(F/S 見れば)
13. それの今の価値がすぐ分かる
14. 換金性の高い流動資産等については実際の決算時の価値がわかる

Q12：時価で作成された F/S の短所

1. 利益を発生させてしまうと支払う税金が減り空白の利益のみが残り現金同等物は次々になくなっていく。営業利益より評価損が多くなるが多々起こりそうである。
2. 損の場合、見栄えが悪い、会社として、あまり悪い状態を見せたくない。
3. 益の場合、ムダに税金だけがかさむ。
4. 流動性の低い、長期保有目的の場合、上記のようなデメリットがある。
5. 後、帳簿の手間が多い。
6. 時価評価なので時価が上がって当期純利益が多ければ税金をいっぱい持っていかれてしまうこと。
7. めんどくさい。
8. 過剰な利益計上をしてしまう場合がある
9. 複雑になる
10. 買った値段が分からない。
11. 未実現の利益が計上される。
12. 客観的に測定しづらい
13. 会計の手間がかかる
14. 利益の過大計上
15. 脱税のために損失を過大計上
16. この未実現利益である評価益は、配当や税金として社外に流出する危険性があるという問題がある。
17. 取得時の価格が分からないので、2年目以降の損益が前期末の額からの損益しか分からず、一気に価格が下がる事も考えられる。(時価を基準にし、原価を基準にしていないから。)
18. 複雑になる。(会計処理が)
19. 未実現利益がどんどん計上されてしまう
20. 粉しょくしやすい
21. 同じ物なのに価値の上下がはげしくなる